



# 生物化学兵器

S・ローズ 編

須之部淑男  
赤木昭夫 訳

みすず書房

## 訳者略歴

須之部淑男 (すのべ・よしお)

1926年浦和市に生れる。1952年東京大学理学部卒業。1957年東京大学理学部大学院修了。専攻 植物生理学。現在 NHK教育局科学産業班副主管。訳書 「二〇年後の世界1,2」。

赤木昭夫 (あかぎ・あきお)

1932年京都市に生れる。1955年東京大学文学部英文科卒業。1963年コロンビア大学大学院新聞科フェロー。現在 NHK教育局科学産業班プロデューサー。訳書 「二〇年後の世界1,2,3」。

---

生物化学兵器

© 1970 Misuzu Shobo

1970年9月20日 第1刷発行

¥ 1000.

訳者 須之部淑男  
赤木昭夫

発行者 東京都文京区本郷3丁目17-15  
北野民夫

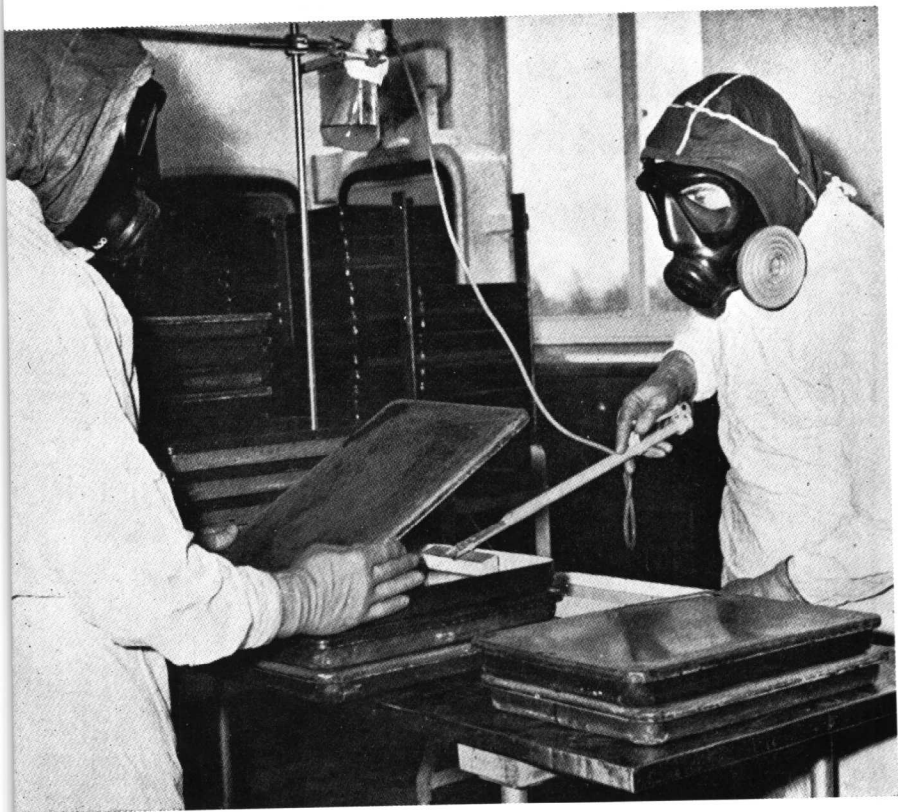
印刷者 東京都新宿区改代町24  
田中昭三

---

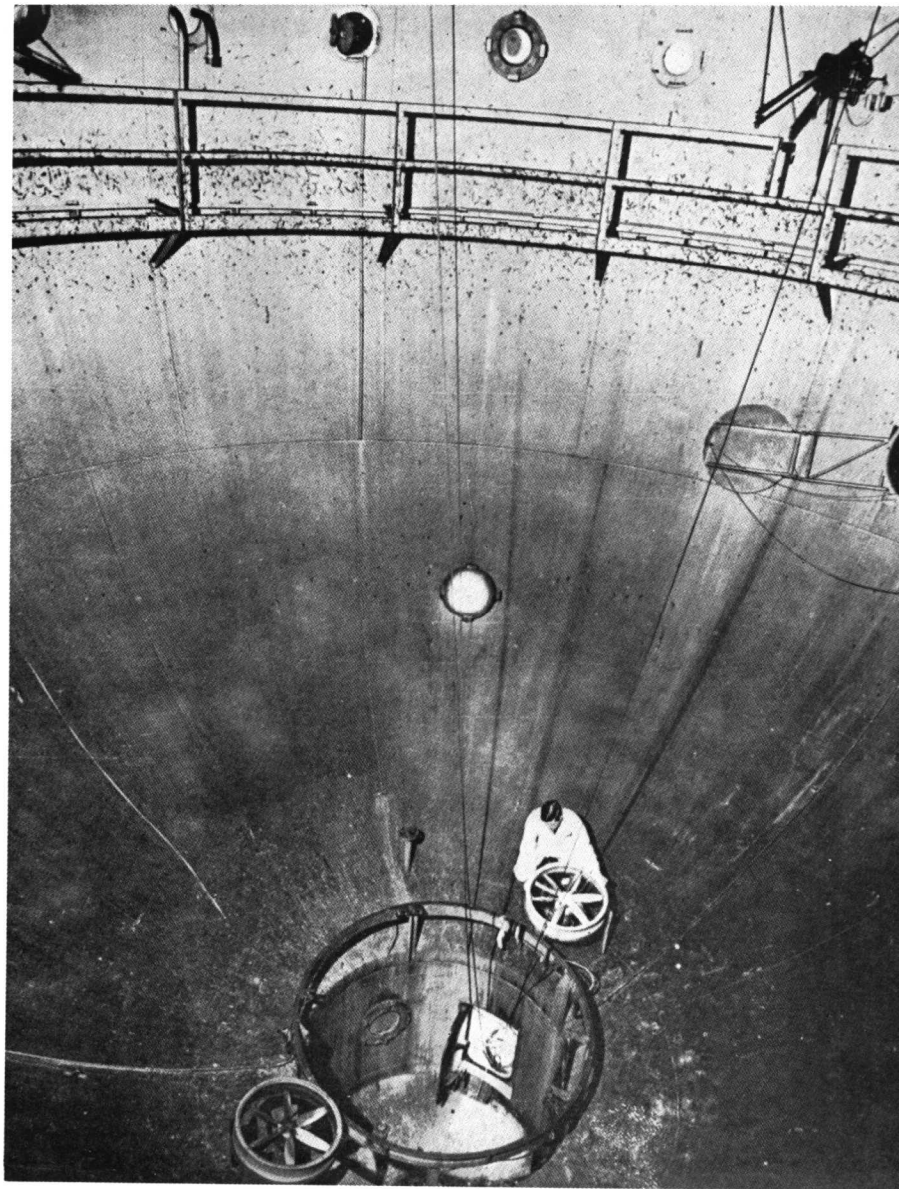
発行所 東京都文京区 本郷3丁目17 郵便番号 113  
株式会社 みすず書房  
電話 814-0131(代)  
振替東京 195132

---

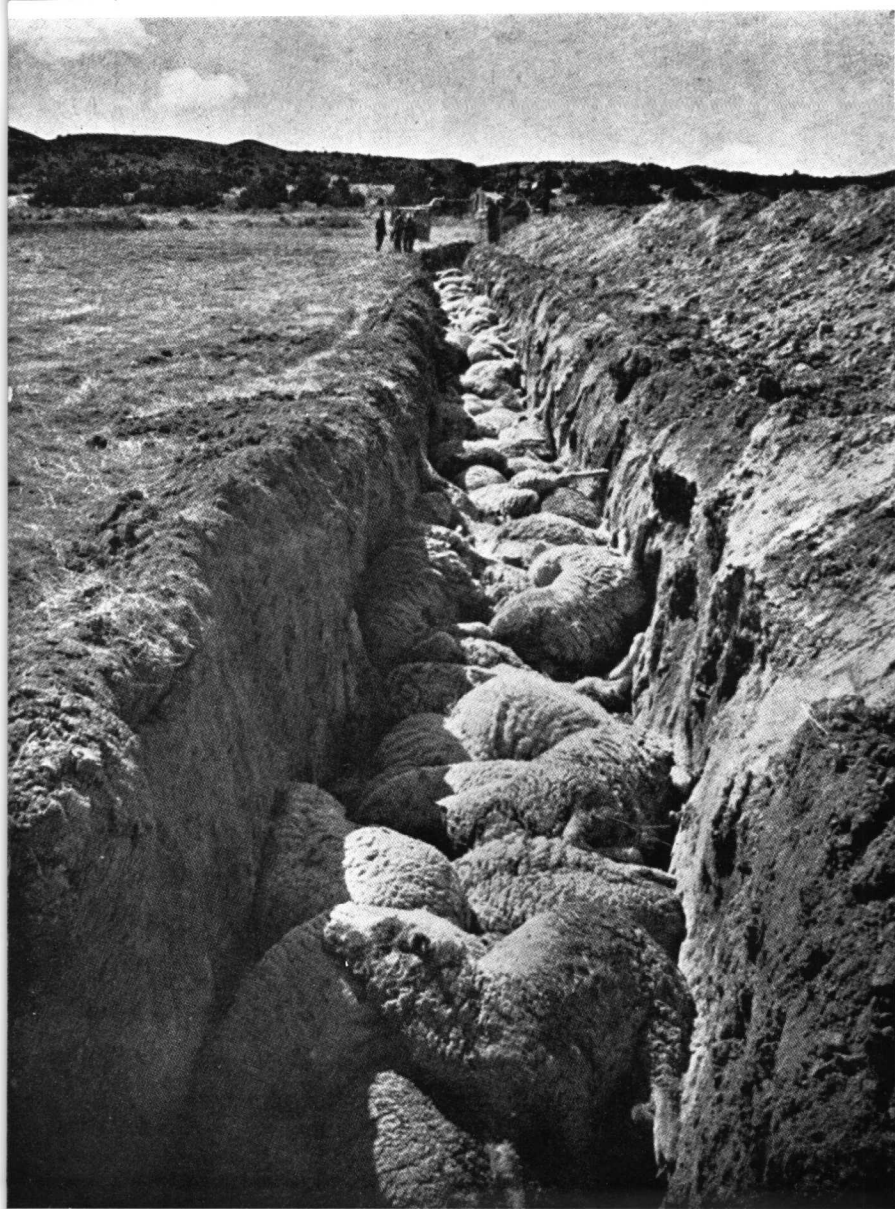
理想社印刷・鈴木製本



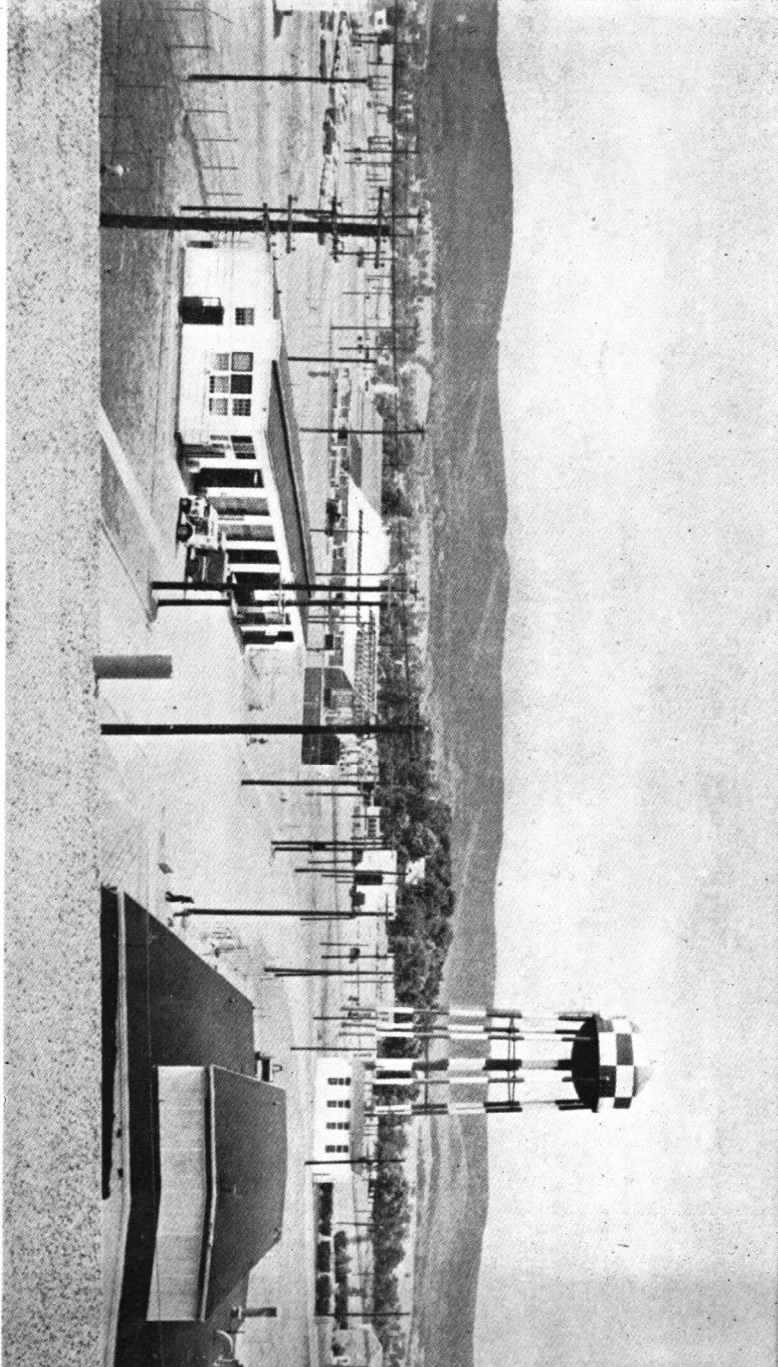
ポートンタウン微生物研究所（イギリス，ウィルツシャー）  
におけるバッチ法による炭疽菌の大量生産（UPI）



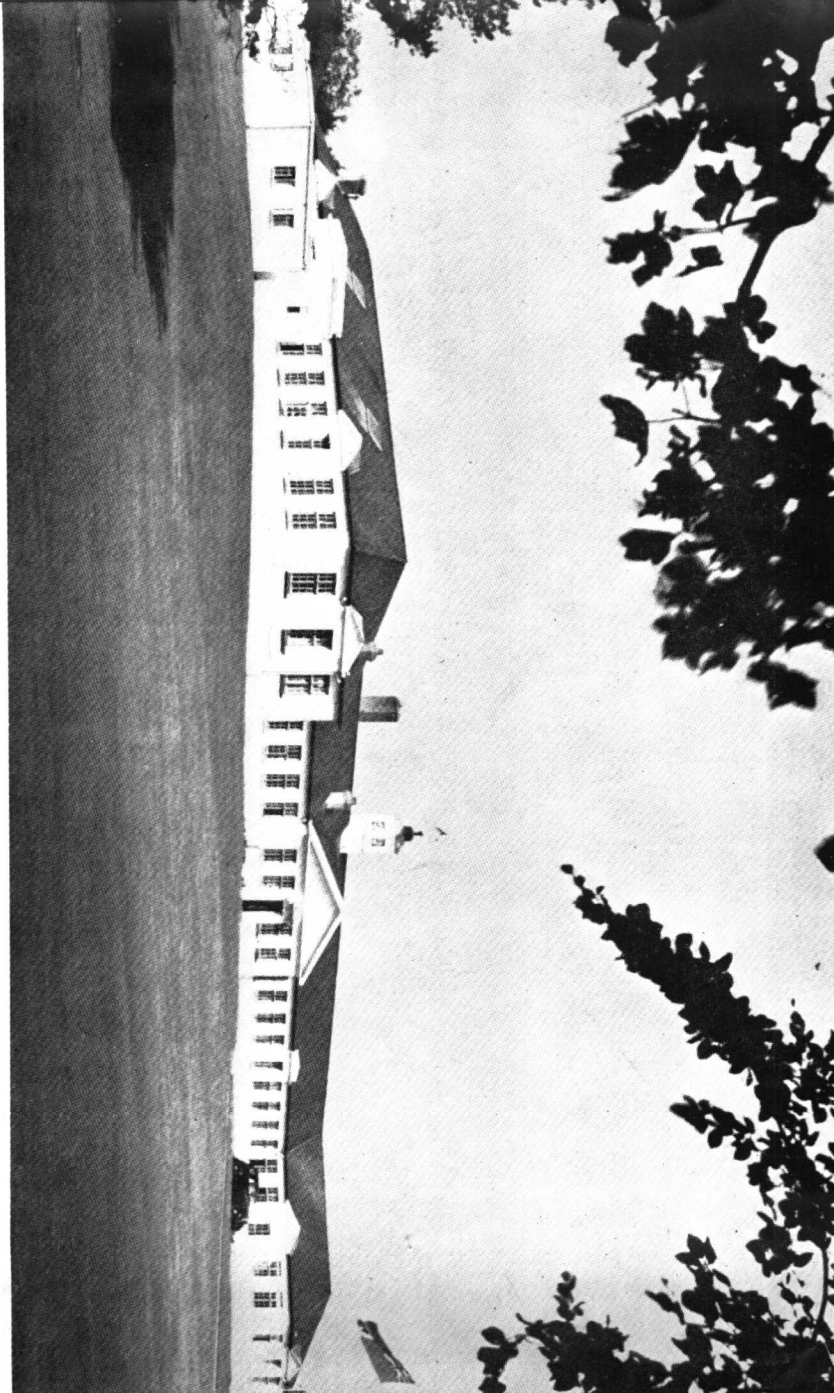
「エイトボール」(The 8-ball)とよばれるこの巨大なエロゾル試験球の中で、小爆弾の散布能力の試験が行なわれる。(U.S.Army)



最近、神経ガスの新型ノズルの試験中、ダグウェイ実験場に隣接した地区で、6,000頭のヒツジが事故のため死んだ。この埋葬溝には懐妊中の雌ヒツジ1,200頭が見られる。（*Science*）



フォートデトリック研究所 (アメリカ, メリーランド州) (U.S. Army)



ポートランドン化学戦防衛研究所本棟 (イギリス, ウィルツシャー) (Crown Copyright, By permission of HMSO)



「マイティ・マイト」——これは一種の送風機で、毒ガス（たとえばCS、この場合はDDT）を、高濃度で噴出させることができる。（U.S. Army）



上図

CSガス缶（手榴弾）  
ベトナムで同様のもの  
が使用された

左図

ガスマスク ベトナム  
で実用試験済

(U.S. Army)





生物化学兵器の使用 中央ベトナム山岳地帯の道路沿いに落葉  
作戦を展開中のアメリカ空軍C-123プロバイダー機 (USAF)

## 生物化学兵器に関するロンドン会議

一九六八年二月二二日、二三日の両日にわたって、ロンドンのポニントン・ホテルで生物化学兵器に関する会議が開かれた。この本は、その会議に提出された報告書をもとに、まとめられたものである。会議の目的は、生物化学兵器の開発の現状、戦時における使用法、またそれについて正しい評価を与え、この種の兵器の国際法上の位置づけについて考察を加え、さらにその開発と使用にともなう倫理的諸問題、とくに科学者の責任について討論することにあつた。

この会議は、J・D・パナール平和図書館が主催した最初の大きな催しであつた。J・D・パナール平和図書館は、種々の資料を蒐集し、平和をめざす闘争を助けるための情報を提供し、ひいては科学のもつ可能性を完全に生かして、戦争のない繁栄する世界を建設しようという目的で設立された教育財団である。——J・D・パナールが比類のない功績を残したのはまさにこの目的のためであつた。

会議は、ベトナムで落葉剤のみならず、いわゆる非毒性化学兵器が使われ、一方イエメンではそれよりも毒性の強い致死性ガスが使われたと報道された事態を背景として、開かれた。会議では、討論の結果、この分野に人材も資金もそれほど大量に投じられていないうちならば、すべての大国が生物化学兵器を放棄するのは、実際に可能で

あることが示された。この種の兵器のもつ性格と脅威について事実にもとづいた知識がひろがれば、生物化学兵器の廃棄、ひいてはより完全な軍備撤廃をめざす闘争がいつそう発展するといふ考えから、以下の論文は本の形でここに発表されることになった。

一九六八年五月　ロンドン

E・H・S・バーロップ

## 編者の言葉

会議の内容がここに一冊の本としてまとめられたが、会議の目的は次のように明確なものであった。まず生物化学兵器の最近の開発状況について、われわれはできるかぎり実のある情報の蒐集を心がけた。それと同時に、核の手づまりから、軍事戦略家たちが生物化学兵器の潜在的な力にますます重きを置きつつあるこんにち、その研究、開発、貯蔵、使用などがもたらす政治的、軍事的、法律的、倫理的意味について、意見を広く伝え、論議を促進することを第一のねらいとした。われわれは——またこの本の編者である私も——将来の、また現実の軍事技術としての生物化学兵器について事実を記述すること、それがもつ意味の評価とを区別するようにつとめた。もちろんこのような区別は仮のものであって、それが仮のものであることは読者にも明瞭であろう。兵器そのもの、あるいはそれをつくり使う技術と、それがつくり使われる政治的ないし倫理的状況とを分離することはできない。しかしそれにもかかわらず、軍事面においても、法律面においても、また一般の人々の頭のなかでも、核兵器と同じく、生物化学兵器の場合も、今いった二つの側面は別々に扱われ、別種の問題を提起してきた。

会議では、こうした数個の問題点のそれぞれについて報告書一篇が読みあげられ、そのあと——多くの場合長時間にわたる討論が行なわれた。会議のための予稿を本の形にするにあたって、一般の人々が読むにはあまりにも専

門的すぎると思われる若干の報告書は割愛した。分量を短くし表現に統一をもたせるため、各人の報告書に若干の編集を加えた。また、報告のあとの討論については思いきり切りつめた。しかし、本文中にその大要をくりこみ、私が速記録を読み返して重要と感じた諸点は要約して追加しておいた。このような処置について、会議の参加者全員が喜んで同意してくれたから、私は参加者の協力を感謝しなければならぬ。こうしてまとめられたこの本が、会議の全容をあますところなく伝え、参加者の人柄や観点の個性的な差異をもあわせて記録し、また読者にとって読みやすいものであることを、私はただただ願うばかりである。

会議を計画し、議事録を読みやすい形に整えるにあたって、会議の実行委員会の面々——委員長のエリック・バーロップ教授、委員のビル・キャリット、ロビン・クラーク、ジョン・ハンフリー博士、またビック・サイデル博士らが、終始協力してくれた。デイビット・パヴェットが、原稿と参考文献の校正という大変な仕事を引き受けてくれた。コリン・スイートとパナール図書館が提供してくれた援助によって、仕事は大幅に軽減された。またとくに次の人々に感謝しなければならぬ。バート・イードが速記録をとってくれた。マーガレット・スターン、アニタ・テラー、ナオミ・ウォルフが、厳しい時間的制約のもとでタイプ浄書を引き受けてくれた。また印刷所の手によって印刷されるまぎわまで絶えず内容の更新を行なったにもかかわらず、ハラップ出版社のピーター・ソマーは、手ざわよく本にまとめる仕事を果してくれた。

会議後二、三ヵ月しか経過していないのに、事態は急速に変化している。またかなりの量の情報がその後入手された。そのため、いくつかの報告書に手を加えることが可能となり、またそれが必要にもなった。たとえば、会議の行なわれた一九六八年二月の段階では、単に推測にすぎなかった個所が——とくにポートンにおける状況などが——今では正確に記述できるようになった。このような改訂は、各報告書の構成を崩すことなく、編集者の挿入と

いう形で、可能なかぎり行なった。一、二の場合、とくに第九章においては、相당한追加を行なうのが妥当と考えられた。このように手を加えた部分の事実や解釈についてもし誤りがあれば、それにはたいしては編者として私が全責任を負うべきである。

一九六八年八月　ロンドン

ステイヴン・ローズ

# 目次

生物化学兵器に関するロンドン会議

編者の言葉

問題提起

## 第一部 生物化学兵器の現状

第一章 化学兵器

第二章 精神錯乱剤

第三章 ナパーム

第四章 生物兵器

第五章 落葉剤

リッチー・コールダー卿

i iii i

J・P・ロビンソン

ii

C・R・B・ジョイス

31

V・W・サイデル

43

I・マレットク

48

A・W・ゴールストン

64